



希望

多治見市立笠原中学校
令和7年度 学校だより『希望』
第5号 令和7年7月18日(金)発行

Good loser (よき敗者)

校長 熊崎 健一

本年度から中体連大会が、東濃地区大会からの開催となりました。生徒数減少に伴う部活動の見直しはどの中学校でも行ってきました。また、近年では国が部活動地域移行の方針を示し、大きくその方向に傾いています。多治見市は約20年前からジュニアクラブを組織し休日の部活動を保護者が立ち上げたクラブで補完する形を維持してきました。ところが、中体連大会出場の要件も多様化・複雑化し、地域クラブの台頭や種目団体ごとの制約の相違もあり、過渡期の困難さに直面しています。とはいえ、どの団体に所属していようが、本校生徒が中体連に向かうこと(その他の大会も同様)を応援する気持ちに変わりはありません。6月末から7月にかけて、私もできる限り応援に出かけましたが、そこには様々なドラマがあり、生徒も普段学校生活では見せないような表情を見せていました。そして、スポーツである以上、勝敗が付きまといまいます。だから、次のような言葉をお昼の放送で贈ることにしました。

中体連東濃大会が終了。誰もが「勝っても負けても悔いの残らない大会にしたい！」と願い、全力を尽くしたと思う。でも、スポーツの大会である以上、勝敗の結果から逃れることはできない。だからこそ、Good loser という言葉を贈りたい。中体連だってオリンピックだって、あるいはスポーツ以外のコンクールだって、最後まで勝利し続けた一人(チーム)を除けば、いつかは負ける時が来る。ほとんどの人は“敗者”の立場を経験する。もちろん、誰も負けることは望まないのに、相手の力量や勝利の可能性の有無に関係なく、ひたすら目の前の試合、目の前のワンプレーに全力を傾ける。それでも、必ずその瞬間は訪れる。ラグビーでは、ノーサイドの精神が重んじられる。激闘を繰り広げた相手であっても、試合終了のホイッスルが鳴ったら同じ競技を愛する仲間として無条件にお互いを讃え合う。敗者は、潔く負けを認めて勝者に拍手を送り、堂々と胸を張っていて欲しい。その人の心根や価値は、その瞬間の態度に滲み出る。自身(自分たち)の負けを相手や他者のせいにするのは、残念である。なぜなら、次なる挑戦や自分の成長につながる事ができない。大会が終わるとまるで「この世の終わりか？」と思わせるほど落ち込む者がいる。しばらく燃え尽きたような状態になる者もいる。立ち止まることは、構わない。でも、これで人生終わったわけじゃない。悔しさも悲しさも全部受け止めて、次の目標に向かうことができれば成長。それはすでに、敗者でなく勝者に向かう姿である。

自分で自分を伸ばすチャンス！

39日間の夏休みが始まります。長いと感じるか短いと感じるかは、本人次第ということになるのでしょうか。やりたいことがある生徒にとっては、毎日が充実して時間を短く感じるかもしれません。一方、これといってやりたいこともなくダラダラと過ごしてしまう時間は、ムダに長く感じるかもしれません。勉強・スポーツ・その他の習い事など、自由に使える時間がたっぷりある夏休みだからこそ、自分で目標・計画を立て、時間を有効に使い、自分で自分を伸ばすチャンスにして欲しいものです。また、中学生ですから、家族の一員としての役割(お手伝いとは言いません)を担うことも大切にしていきたいものです。中学生は、もう“ほぼ大人”なのですから！

我々教職員も、研修等に多くの時間を費やす夏休み期間になりますが(今年は、引越し準備…)、生徒のことが頭から離れることはありません。生徒も親御さんも相談などがあれば、遠慮なく学校へ連絡をください(8/8~17の学校閉校期間中は、学校携帯 070-3116-8284へ)。そして、何より心身ともに健康で安全な日々を過ごし、元気に再会できることを切に願っています。

